

冒険物語 結末描こう

「つづきは、あなたが作ってください」。本の中ほどに真っ白いページがある絵本「ヤドカリの物語」を、関西の小中学校教諭らでつくる「子どものレジリエンス研究会」（葛城市）が自費出版した。主人公の気持ちになって、物語の続きを子どもたちに考えてもらうのが狙いだ。代表で元小学校教諭の上島博さん(62)は、「心の絵本」と名付け、「主人公とともに心の旅に出て、自分の力で、生き方について考えてほしい」と話す。

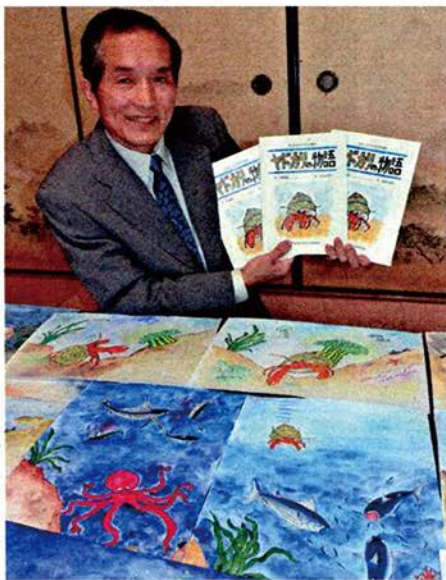
(福永正樹)

葛城の元教諭ら 絵本出版

絵本は、「どうして生き見開き2ページの白紙が現れているの?」と悩むヤドカリが主人公の冒険物語。その答えを見つけようという旅に出て、仲間助けられながら、考えを深めていく。自らを投影しやすいように、主人公の「名前を決めてね」と、読者に促している。

物語は、上島さんのペンネーム「石歌庵」と、読者の共著の形をとり、表紙の著者欄には空白を設けている。

上島さんは4年前、この物語を教材にして授業使



「ヤドカリの物語」を手にする上島さん。カツオが小魚をいじめるシーン(手前右)など色とりどりの絵が添えられた葛城市で

中に白紙ページ 創作通し生きる力養って

い、児童に続きを考えさせてみた。

両親と再会して「生きていてよかった」というハッピーエンドになったり、出会った海賊船の幽霊に「命があることはいいことだぞ」と教えられたり。

上島さんは「正解がなく、自由に空想の世界に入っていくから、子どもたちは楽しそうにどんどん書き進めていった」と振り返る。物語として完結させるため、後半には、石歌庵が書いた「つづき」もあるが、子どもたちに読み聞かせる際には「にっこり笑って本を閉じてほしい」と求めている。そして巻末には、「あなたが考えた『つづき』の方が、あなたにとって大事な物語なのです」とメッセージを添えた。

上島さんは「悩み事の答



「ローカー」は、ヤドカリが作った言葉です。あなたが自由に想像してください。

「ヤドカリの物語」の最初の場面。ヤドカリが生きる意味を探しに出かける

えは、人から教わるものではなく、自分で見つけ出すもの。絵本を通して、逆境に耐え、立ち直る力を養ってほしい」と思いを語る。

同研究会は、落ち込んで立ち直れる心の力「レジリエンス」を教育に生かそうと2006年に発足。ストレスマネジメントや不登校対策などの研修を行うほか、「命の大切さについて考えてもらいたい」と、教育現場で子どもたちが取り組みやすい教材作りを進めている。ヤドカリの物語を含めてこれまでに8冊を出版した。

B5判、40ページ。税込み1080円。インターネット通販サイトのアマゾンで購入できる。問い合わせは上島さん(0745・48・6262)。